

聞・思・修

子ののたまわく、字
びて時にこれと習う、
亦た既(既)ば一からず

『論語』学而第一の書き出しの一節で、旧制中学一年ぐらいならだれでも知っている言葉。また学ハ倣ナリで見習うこと。習は雛鳥が親鳥の羽はたく姿をみて自分も羽ばたきを身で覚えようしている姿の象形で、実践してみることの意味。説を(よろこぶ)とよむのは

説^説の同音仮借。

「学習」のよろこびは、単に人から教えられたことの知り覚えることではない。そのことを自分の身のうえで実践してみたときはじめて「学びのよろこび」があるのだと語っている。多く学んで知つて、その蓄えた知識の量を誇っている「学者先生」もいる。反対にわずかな学びも、自分の日常生活のうえに実践してみると、それこそほんとうの「学び」、このことばに関連して、おなじ論語の「為政篇」を思い出す。

思ひてよれば、れば則ら
猶(あやう)一。
読書をしただけで、自分の身の上・生活のうえで考えないと、本当に知つたとはいえない。無知と同じ。

反対に、自分勝手な独り合点で、ひとの教えを学ばぼうとしないのは、とても危険だよ。しかし現実には、「学と思」。バランスのとれたひとはなかなかないものだ。

仏教では
二慧(さんえ)といつて聞慧・思慧・修慧。悟りに至るための三条件として挙げる。
眞実を聞きひらく智慧(如来の本願にめざめ)
」「信心」

この身の上に眞実を思う智慧「歡喜」
この身のうえに眞実を歎び実践する。「乃至一念」。
これはまた

「聞其名号」(南無阿弥陀仏の名号は久遠劫の弥陀本願の呼び声・帰命無量寿如来・南無不可思議光)
「信心歡喜」(凡夫のこの身が今生に如来の本願の智慧と慈悲のなかとのめざめ)
「乃至一念」(乃至十念)(もつたいないこの身の感謝のお念佛を一遍でも十篇でも)

弥陀の名号となへつ

信心まことにうる人は

憶念の心つねにして
仏恩報するおもいあり(冠頭和讀)

お念佛が口に出でくださるにつけて、煩惱具足のこのわたくしをめあてに、呼びづけてくたさる如來のご本願のまつただなかに今生かされている身の幸せを歎喜しつつ、如來大悲の恩徳報謝の称名念佛。その称名念佛にまた呼び覚まされてお念佛のなかの豊かな生活。これを『淨土の真宗』と言う。

「駒どりの家」は築百年以上という古い民家ですが、ここに移転するときに土台をしつかり補強していたので、倒れませんでした。

トがかけてありました。そのとき、ちょうど数人のボランティアの方たちが来ていて今後のこと相談していました。私が訪ねると、驚いたことにその中の一人の方が、「これどうぞ」と、おにぎりを出してくれたのです。

それが、菅野さんでした。自分たちが被災して大変な時なのに逆に私に気を使つてくださる。その暖かさが胸にしました。

菅野さんは、幼児のころ脊髄カリエスにかかり、小学校には通つていません。近所の学生さんを家庭教師に頼み、来てもらいました。中学から通学し、高校に進みます。そこで、生涯の友人に出会いました。川口潤一郎さんです。

一緒に知的障害児の施設でボランティアをしていたとき、ひとりのこどものことを、菅野さんが「あの子かわいそうやなあ」というと、川口さんは即座に、「お前、差別しどんやないのか」と答えたのです。「『かわいそう』というのは、上からものを見ているのだ」ということを、彼から教えてもらつた」と菅野さんは、振り返ります。

ふたりは、今一緒にNPO「生きがいデーサービスえにし」を始め、地域でお年よりが安心して暮らせるように、一步を踏み出しました。

朝刊配達、塾の経営、「えにし」の活動と、とても忙しいなかで、「駒どりの家」のボランティアはいまも続けています。「いろんな方たちと出会って、自然な形で、たくさんのこと身につけさせてもらった」と語る、菅

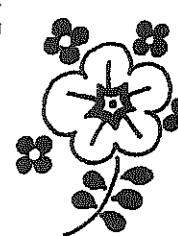
私は菅野喜一さん(五十九歳)について、翌日大阪局に応援に入りました。十日余り震災関連の放送に携わり、広島へ帰る前日、以前、番組でお世話をした宅老所「駒どりの家」(神戸市長田区)を尋ねたのです。

当時、広島局で勤務していた私は、震災の二慧(さんえ)といつて聞慧・思慧・修慧。悟りに至るための三条件として挙げる。

電車のなかの忘れ物に傘が一番多いとか。雨降りのときには傘ほど貴重なものはないのに、雨があがつた途端、これほど邪魔なものはないと見捨てられる。老いた年寄りは忘れた傘。

野喜一さん。病弱だった子どものころの体験を、人への優しさに育てあげた姿は見事です。

「ラジオ深夜便」三月号
アンカーエッセーより



足元から
白鳥がたつ
「こ」とば

このものころ子どもたちが「夜回り」をした。拍子木にあわせて叫んだことは「火の用心 戸の用心 足元から鳥がたつ」。防犯ブザーをつけるより効果があるのではないか。

頭かくして
尻かくさず

昔、カルタ絵には、蚊帳(かや)のなかにげこんだ男が、ふんどし始めたお尻を蚊帳の外に出しているのがあったのを思い出す。当面、人の目をごまかしても、やがてはバレるものだ。

どんなに外面(そとづら)を装つても、化けの皮はすぐにはがれる。

当面、人の目をごまかしても、やがてはバレるものだ。

知らないと見捨てられる。

老いた年寄りは忘れた傘。